

序

‘サクロ・モンテ（聖山）’は、より根本的、象徴的な意味においては、山が古来から持つ聖性に、キリスト教徒にとっての最終的な目的地である「天のエルサレム」への憧憬を重ね合わせて、中世より後（特に15世紀末から18世紀半ば）に、修道士のためにではなく、多くの巡礼者や悔悛者を聖なる頂きである「天のエルサレム」へ至らせるために、天と地が出会う場所である聖なる山に、聖地（「地上のエルサレム」）を再現したり、聖道を接続したりした、キリスト教的、芸術的、とりわけ苦行的な巡礼施設と定義できる。また、中世に説かれ流布した内的巡礼を視覚化したもの、あるいは、より現実的、歴史的な意味で、異教徒による迫害のためにますます困難になった聖地パレスティナへの実際の巡礼に匹敵する体験を可能にするための代用施設とも捉えられる。こうした解釈はいずれも正しく、‘サクロ・モンテ’は、中世までの現実の聖地巡礼や内的巡礼の伝統のすべてを受け継いで生まれたものに相違ない。

今日、発生地のイタリアでの呼称によって一般に‘サクロ・モンテ（聖山）’と呼ばれている、こうした近世の代用巡礼施設群は、具体的には、山や丘などの高所の限定された屋外空間か斜面上に、一連の礼拝堂や、教会堂（古くからその土地で崇敬されていた聖母マリアや聖人などに献堂されていることが多い）、修道院などの複合的な宗教建築を擁しており、^{ヴィア・クルーチェス} 十字架の道や ^{ヴィア・サクラ} 聖道などの別の一連の信心業用の小複合体が併設されていることもある。そして、一連の礼拝堂のなかでは、キリストの生涯や受難、あるいは聖母マリアや聖人の生涯などに関する聖なる場面が、巡礼者を堂内の場面へ物理的、また心理的に巻き込むために、きわめて表現力に富む絵画と、まるで生身の人間のように見える等身大の独立した群像彫刻（レリーフの場合もある）によって、演劇的に表現されている。

このような魅力的なサクロ・モンテについては、イタリア国内のものだけに限ってみても、これまで、世界中の研究者によって、美術史や建築史的側面から、また、キリスト教や、とりわけ創設者が属していた修道会（フランシスコ会やカプチン会など）の歴史的側面などから、さまざまなアプローチが積み重ねられてきた。その結果、とくに規模が大きく重要な施設については、今日では、その歴史的全体像はかなり明確に映し出されている。また、その他のサクロ・モンテ群との関係やイタリアのサクロ・モンテ全体の歴史的展開などについても的確な跡付けが試みられるようになった。しかし、第1章でより詳しく述べるように、イタリアを除く西欧の国々、とりわけアルプス以北の国々では、すでに20世紀初頭から、‘カルヴァリオ（山）’や‘十字架の道’などの研究（イタリアのヴァラッコの施設も言及されている）において、ヨーロッパの複合的巡礼施設を総合的に取り上げる傾向がみられるのに対し、イタリアにおいては、国内のサクロ・モンテと、ヨーロッパのその他の国々においてほぼ同時期に発生し、同じような展開をみせる複合的巡礼施設群とを総合的

に扱おうとする研究は、不思議なことにごく最近までまったくみられなかった。それどころか、今日に至っても、イタリアのサクロ・モンテをイタリアに特有なもののみなし、その他の国々の中世末期やバロック期の模造建築や代用巡礼施設と一緒に扱うのを批判する研究者もいる。しかし、イタリアにおいても、最近になってようやく、国内のサクロ・モンテをヨーロッパ的視野のもとに捉えようとする試みが本格的に開始されるに至った。とはいえ、ピエモンテ州サクロ・モンテ・ディ・クレアの自然公園と造成地区に属する資料センターによって開始された大規模な調査・研究はまだ緒に就いたばかりである。従って、全ヨーロッパ的視野で捉えられるべきイタリアのサクロ・モンテの問題の多くは、同資料センターとヨーロッパ各国の巡礼施設群の研究センターや研究者との共同研究によってこれから解明されていく段階にある。

本稿で取り組む‘サクロ・モンテ’の発生、ないしは起源の問題も、稿者によれば、そうした視野のもとでの解明が必要な問題のひとつである。しかし、以上のような状況ゆえにまだ解明には至っていない。‘サクロ・モンテ’の発生については、これまで、キリスト教的な理由やフランシスコ会との関係、巡礼形態の変化などが理由として挙げられてきた。また、特に、堂内の壁画や迫真的な群像彫刻による玄義場面の設営の起源については、中世末期に隆盛した聖劇や、北イタリア（特にロンバルディア州）に散見されるフランシスコ会と密接な関係にあるトラメッツォ（内陣と外陣を隔てる仕切り壁）のキリストの受難を主題とした壁画、また、イタリアでも流布したことが明らかでデューラーを筆頭とするアルプス以北の版画家による受難伝の版画、さらには、フランス南部からイタリアのエミリア・ロマーニャ州、ないしはトスカナ州にまで広く遺例が残る、15世紀のキリストの《^{ミソ・トツガ}埋葬》、ないしは《ピエタ》を主題とする、きわめて表現主義的な等身大の群像彫刻などからの影響が指摘されている。しかし、‘サクロ・モンテ’を構成している大小の礼拝堂の全体的配列（＝形態、もしくは類型）や、その形態を構成している個々の礼拝堂の建築的要素に着目し、それらを、同時代のその他の国々の類似の複合的施設や、先行の時代の、同じような意味を持っていた建造物などと比較・検討しながら、‘サクロ・モンテ’の発生や展開を考察する試みは、管見の限りまだなされていない。西欧においてエルサレムとの関係で建設された、先行する時代の建造物群を紹介した類似の研究がイタリアにおいてもまったくないわけではないが、存在するその僅少な論考も、いくつかの遺例をクロノロジー的に紹介するにとどまっており、そうした建造物群と、ヴァラッロとサン・ヴィヴァルドの代用施設の初期の形態とがどのように関係しているのかまでは明らかにしていない。そのような中で、G. ジェンティーレの近年の論考（1996年）だけは、西欧のその他の国々（特にアルプス以北）の同時代のエルサレムの模造建築や複合体と、イタリアの初期の‘代用エルサレム’とが何らかの関係をもち、同時進行的に展開していることを示唆し、若干の例を挙げて比較している点で、唯一啓発的なものと言える。

そこで、本稿では、15世紀以前の西欧におけるエルサレムの模造建築の‘模造の形態’や構成要

素の変遷、また、模造形態に変化を生ぜしめた背景などを概観することによって、イタリアのヴァラッコとサン・ヴィヴァルドの‘代用エルサレム’(後代のサクロ・モンテの手本)の形態の発生の問題にアプローチしてみたい。そしてその際、方法としては、イタリアの旧来の方法を批判する意味も含めて、西欧(とりわけアルプス以北)における同時代の類似の複合的施設群との比較・検討の中から回答を導き出すような方法を採用した。論文の展開としては、‘サクロ・モンテ’等の用語の批判と、今日までのイタリアのサクロ・モンテ研究の流れについての概観を行った後、聖地パレスティナ、とりわけエルサレムの都が、15世紀以前には西欧においてどのように模造されていたのかについての考察に入りたい。続いて、数世紀を経るなかで変形を被ってしまった現在のヴァラッコとサン・ヴィヴァルドの両施設の最初期の様相を明らかにし、それらの形態が、15世紀以前のそれら以外の西欧の国々(特にアルプス以北)におけるエルサレムの模造建築や複合体と無縁ではありえないことを明らかにしたい。また、同時に、イタリアのそれらふたつの‘代用エルサレム’がもつ独自性についても考察したい。そして最後に、その後のヴァラッコとサン・ヴィヴァルドの施設の形態の変化と、対抗宗教改革期にアルプス南麓に陸続と建設されていくサクロ・モンテ群の隆盛の様子を、主にそれらの形態(ないしは類型)に着目して跡付けてみたい。

目 次

凡例

序

p. i

第1章 ‘サクロ・モンテ’の定義と研究略史

1 ‘サクロ・モンテ’の定義.....	p. 1
1) アルプス以南(主としてイタリア)で出版された辞典類に見られる定義.....	p. 1
2) アルプス以北(主としてドイツ語圏)から出版された辞典類に見られる定義.....	p. 4
3) 諸研究者の見解.....	p. 7
4) 稿者の考え	p. 12
2 イタリアのサクロ・モンテの研究略史.....	p. 15
1) 20世紀末まで	p. 15
2) アルプス以北の‘十字架の道’や‘カルヴァリオ山’研究と近年のイタリアにおけるサクロ・モンテ研究	p. 18
3) 日本におけるサクロ・モンテ研究.....	p. 22

第2章 15世紀以前の西欧におけるエルサレムの模造建築

はじめに	p. 28
1 西欧におけるキリスト教徒のエルサレムに対する憧憬とその模造の伝統、並びにサクロ・モンテとの関係	p. 28
2 14世紀以前の西欧におけるエルサレムの模造建築.....	p. 30
1) エルサレムにおけるキリストの墓の小聖堂と復活聖堂の変遷.....	p. 30
2) 西欧における14世紀以前の‘模造墓’と‘模造アナスタシス’の建設例.....	p. 31
3) ‘模造墓’と‘模造アナスタシス’の特徴.....	p. 36
4) 2節の総括.....	p. 38
3 15世紀の西欧におけるエルサレムの模造建築.....	p. 39
1) 旧来型のエルサレムの模造建築とその後の展開.....	p. 39
2) 複数の模造建築からなる複合的‘エルサレム’の登場.....	p. 44
3) 連続する‘留’による新たな‘エルサレム’模造体の出現.....	p. 53
a 西欧における15世紀までの受難信仰 ‘十字架の道’の発生に及ぼした受難信仰の間接的影響	
a-1 11世紀以前の受難信仰と‘十字架の道’	p. 53
a-2 12世紀から15世紀までの受難信仰と‘十字架の道’	p. 56
a-3 ‘十字架の道’の発生に及ぼした受難信仰の諸要素.....	p. 59
b 15世紀の特殊な受難信仰とその信心の諸形態(=初期の‘十字架の道’)	p. 60
b-1 キリストの‘転倒’に対する信仰とその信心形態.....	p. 60
b-2 キリストの‘苦しみの歩み’に対する信仰とその信心形態	p. 65

b-3 キリストの‘苦しみの留’に対する信仰とその信心形態.....	p. 65
b-4 ‘靈的巡礼’の信心書	p. 70
結びにかえて.....	p. 74

第3章 ミラノ管区ヴァラッロのサクロ・モンテ フラ・ベルナルディーノ・カイーミの‘エルサレム’

はじめに	p. 81
1 現在のヴァラッロのサクロ・モンテ.....	p. 81
2 初期のヴァラッロのサクロ・モンテに関する先行研究.....	p. 84
3 最古の巡礼案内書に言及されている礼拝堂とミステーリ.....	p. 89
4 1514年の案内書に挙げられた礼拝堂の場所の同定.....	p. 94
5 1514年の案内書の礼拝堂群とエルサレムの‘キリストゆかりの場所’.....	p. 111
6 ベルナルディーノ・カイーミの‘エルサレム’ 結びにかえて.....	p. 116

第4章 トスカーナ管区サン・ヴィヴァルドのサクロ・モンテ フラ・トマーゾ・ダ・フィレンツェの‘エルサレム’

はじめに	p. 126
1 現在のサン・ヴィヴァルドのサクロ・モンテ.....	p. 127
2 レオ10世の返書 問題の所在	p. 128
3 検討資料群と同定問題の再検討.....	p. 132
1) 紹介済みの史料と新たな検討史料	p. 132
2) 同定問題の再検討	p. 136
4 フラ・トマーゾの地形模倣的‘エルサレム’	p. 138
5 地形模倣的‘エルサレム’からサクロ・モンテへ 結びにかえて.....	p. 144

第5章 形態の変遷から見たその後のイタリアにおけるサクロ・モンテとその他の複合的巡礼施設の展開

はじめに	p. 157
1 トレント公会議後のサクロ・モンテ.....	p. 158
1) ヴァラッロとサン・ヴィヴァルドの代用‘エルサレム’の変容.....	p. 158
2) 改造中のヴァラッロのサクロ・モンテの影響下に建設された新しいサクロ・モンテ.....	p. 160
3) ロザリオ型(=ヴァレーゼ型)サクロ・モンテの登場.....	p. 162
4) ‘十字架の道’を主題としたサクロ・モンテ.....	p. 166
5) 確立された祈禱や信心には則さない規則的な礼拝堂の並びをもったサクロ・モンテ.....	p. 170
6) 公会議後の唯一の‘新しいエルサレム’型サクロ・モンテ.....	p. 172
7) 堂内内包型サクロ・モンテ.....	p. 173
2 南チロル(アルト・アディジェ)のカルヴァリオ山.....	p. 176

図版・図版出典

結語

参考文献

謝辞

結 語

終始巡礼の実践によって貫かれていた中世の西欧のキリスト教徒にとって、巡礼は生活の象徴的な瞬間を意味していた。当時、聖地は、スペインのサンティアゴ・デ・コンポステラ、イタリアのローマ、そしてパレスティナのエルサレムであったが、これら三大聖地のうち、神の存在の物理的痕跡や史跡、また、キリストの歴史的実在性の故に、キリスト教徒にとってとりわけ重要であった（ある意味では現在も）のはエルサレムであった。この聖地パレスティナへの巡礼の歴史は古く、4世紀前半にコンスタンティヌス大帝によって町の宗教的設備が再建された直後に遡るが、とりわけ10世紀以降は、巡礼の数が全体的に増え、エルサレムへの巡礼も、サンティアゴ・デ・コンポステラへのそれと並んでますます頻繁に行われた。しかし、13、14世紀になると、十字軍は所期の目的を達せられずに失敗に終わり、異教のトルコ帝国の勢力は再び拡大した。また、ヨーロッパの農業が発展し、日常生活も次第に改善されていった。さらに、聖体の秘蹟に対する信仰も普及したし、フランシスコ会修道士は、キリストの受難に対する信仰を煽り、町々を一時的にエルサレムに変貌させるのに成功した。また、神秘主義者は日々の生活を送るなかで個々人のなかにエルサレムのキリストを探すことを説教や著作によって説いた。そして、このような政治や経済、宗教、信仰上の諸状況が原因となって、危険を冒し、大金をかけてまでエルサレムに巡礼する必要性が次第に失われていった。

このような状況のなかで、生命を賭してまでは危険な長旅を敢行できない者に巡礼の機会を提供し、巡礼の意味を後世に伝えることを目的に‘代用的実践’が導入されるようになった。従って、居住する地域の近くにある^{サンチュアリオ}巡礼地への巡礼や奉納行為は、15世紀にあってはエルサレム巡礼の‘代用的実践’を意味していた。このようなエルサレムと代用聖地との関わりは、そこに何らかの特別な聖遺物（聖地からの請来品であればなおさらよい）が収められたり、建築物の外観や献堂名に聖地パレスティナを偲ばせるものが含まれたりすればますます強められることになった。聖なる建造物、聖なる品々の多くが、いわば聖地の象徴的模造品や聖遺物である西欧では、キリストゆかりの地（場所）を何らかの形で模し再現するという願いは、早くからコンスタンティノポリスやローマ、ボローニヤ等で具体的形をとって表現されていた。そして、9世紀を過ぎると、第2章で見たように、エルサレムの聖墳墓（キリストの墓）や円形プランの^{アナスタシス}復活聖堂を記念、あるいは模倣した小礼拝堂や小神殿の建設は全西欧的に展開された。しかし、西欧の中世の模造建築は、あくまで聖墳墓が復活聖堂、あるいはその両方の模造に留まっていた。これに対し、15世紀に入ると、模造の‘複数化’、ないしは‘複合化’の傾向が見られるようになる。また、キリストの受難に対する特殊な諸信仰を実践するための巡礼施設である一種の十字架の道が建設され始めたが、これもまた、エルサレムの苦しみの道に関係している点で、一種のエルサレム模造と言えるものであった。そして、こ

のようなエルサレム模造の発展、ないしは変化、探究の期間を経て、15世紀末と16世紀初めに、西欧における最初にして最後のもっとも写実的な代用聖地が、聖地の番人であり、聖地巡礼者の案内も任されていたフランシスコに属する修道士によって建設されるに至った。それが、北イタリアのヴァラッコの‘代用エルサレム’(後にサクロ・モンテへ移行)であり、中央イタリアのサン・ヴィヴァルドのそれであったと言える。

しかし、サクロ・モンテの起源や成立過程を、まずはその初期の形態である‘代用エルサレム’に遡って、以上のような西欧の長いエルサレムの模造の歴史に照らして納得のゆく形で示してくれた論考は、少なくともイタリアにはまだ存在していなかった。そこで、模造対象の数や規模の変化に留意しながら西欧におけるエルサレム模造の展開を辿ると同時に、初期のふたつの‘代用エルサレム’の形態(=類型)、すなわち礼拝堂の配列やその構成要素を明らかにすることによって、15世紀までの西欧におけるエルサレム模造の展開と、イタリアの初期のふたつの‘代用エルサレム’の誕生が決して無縁ではありえないことを、できるだけ具体的に、また視覚的に示そうと試みたのが本稿である。そして、その際、ごく最近までイタリアでは視野に入れて考察されることがない、西欧のその他の国々(とりわけアルプス以北)の類似の施設群も考察対象とした。それは、サクロ・モンテの発生は、西欧的、さらには全欧的視野の下でしか解明できない問題であると信じたからである。

イタリアを除く西欧の国々の複合的巡礼施設については、まだほとんど踏査できておらず、所期の目的を達成したとは言い難いが、設定した課題の解明のために稿者が考察した過程をいま一度略述し、結語としたい。

第1章(‘サクロ・モンテ’の定義と研究略史)では、まず、‘サクロ・モンテ(聖山)’についての捉え方が、辞典や研究書、諸論考によって多少とも異なっていると思われたので、具体的な考察に入る前に、‘サクロ・モンテ’という用語の定義の再確認と批判を行った。具体的には、イタリア国内で‘サクロ・モンテ’として列挙されている施設群と、それらと形態的に非常に類似している‘カルヴァリオ(山)’や‘十字架の道’の複合体等の西欧のカトリック圏(とりわけアルプス以北)の類似の複合的巡礼施設群についての捉え方の違いを概観した。そして、それによって、イタリアとアルプス以北の研究者の間に、それらの捉え方に関して明らかな相違があることを明らかにした。次いで、イタリアのサクロ・モンテの研究史についても略述し、ここにも、イタリアとアルプス以北の研究者との間に、‘サクロ・モンテ’の把握の仕方やそれらに対するアプローチの仕方に関して違いがあることを明らかにした。そして、その後で、そうした諸見解に対する稿者の考えと本稿で取った態度について述べ、最後に、日本におけるサクロ・モンテ研究の現状についても一言した。

次いで、**第2章(15世紀以前の西欧における‘エルサレム’の模造建築)**では、14世紀以前と15世紀に分けて、模造建築の展開を概観した。まず、14世紀以前については、ボローニャのサント・

ステファノ教会堂を唯一の例外として、キリスト教徒の聖地エルサレムに対する憧憬は、もっぱら‘聖墳墓(キリストの墓)’の小礼拝堂か、それを覆う円形プランの‘復活聖堂’^{アナスタシス}、ないしはその両者の模造を通して象徴、表現されてきたことを示し、このような模造方法のいずれかに還元される建築群が、時代的、地域的にどのように展開し、分布しているかを概観した。そして、そうした基本的な共通の特徴の他に、それらに看取されるより詳細な諸特徴についても言及して、15世紀以降の代用巡礼施設群との関係や相違点などを明らかにするための基礎とした。続いて、15世紀については、この時期に平行して少なくとも三種類のエルサレムの模造法、すなわち1)旧来型の模造、2)複数の模造建築からなる複合的‘エルサレム’の登場、3)連続する‘留’^{スタチオ}による新たな‘エルサレム’模造体の出現が識別されたので、それらに従って模造の様子を概観した。まず、1)では、14世紀以前の旧来のエルサレム模造法に類する形で依然として単体で建設された15世紀以降の模造建築を概観した。そして、それらと、14世紀までのエルサレムの模造建築群との関係や相違点などについて考察した。次いで、2)では、複数の建造物によってエルサレムを想起させるという意味で、ポローニャのサント・ステファノ聖堂の遠い子孫とも言える西欧のいくつかの複合体(ゲールリッツやコルドヴァ、ブリュージュ、トロワ、ファブリアーノなど)を検証した。そして、特に礼拝堂の配列や構成要素などに注目することで、それらとイタリアの初期のふたつの‘代用エルサレム(後にサクロ・モンテへ移行)’の形態や構成要素との共通点を明らかにした。最後に、3)では、当時の熱烈な受難信仰に促されて、北欧(特にフランドル地方)やドイツなどに出現し始めた、複数の‘留’^{スタチオ}による新しい巡礼用の一種の‘エルサレム’の複合体について概観した。これらの複合体は、受難の間にキリストが行った‘転倒’や‘苦しみの歩み’、‘苦しみの休止(留)’などを記念する信仰の実践用に建設され始めたものである。それらは、15世紀にはまだ、十字架か、それらより幾分精巧な聖像柱によって構成されていることが多く、大抵は素朴な絵かレリーフによるキリストの受難場面が付されていた。初期(ゴシック末期)の‘十字架の道’の形態でもあるそうした複合体は、イタリアの初期のふたつの‘エルサレム’の形態にも、創設者が没した直後から少なからぬ影響を与えているので、ここでも、イタリアの初期の二例が西欧のその他の国々の‘留’による新しい複合体の傾向と無縁ではないと証明された。

次いで、第3章(ミラノ管区ヴァラッロのサクロ・モンテ フラ・ベルナルディーノ・カイーミの‘エルサレム’)では、今日イタリアにおける最古のサクロ・モンテとされているヴァラッロの複合的巡礼施設に考察を移した。同施設は、パレスティナへの渡航経験があったフランシスコ派厳修会の神父、ベルナルディーノ・カイーミ(15世紀前半~1499年)が、キリスト教徒に擬似体験も可能な代用施設の提供を目的として建設したものであるが、この施設には、彼が没した直後から、後任の修道士と具現者である美術家たちによって、カイーミの構想にはなかった礼拝堂と‘ミステリー’表現が加えられ始めた。そして、その後も、建築家ガレアツォ・アレッシによる再整備計

画期（1565～1569年）や、ミラノ大司教のカルロ・ボッロメオ（後に列聖される）の新しい計画と再整備構想期（1570年頃～1585年）、さらに、ノヴァーラ司教カルロ・バスカペの最終決定による大幅な再整備の実行期（1593～1640年頃）を経るなかで、根本的な修正が加えられてしまい、今日では、外観からカイーミの構想やそれに基づく初期の礼拝堂の配列を推測することは困難である。それは、とりわけ徹底的な改造が行われた中心ゾーンにあてはまった。しかし、カイーミが構想した代用の‘エルサレム’時代の施設の様相を復元しなければ、それと旧来の‘エルサレム’の模造群との関係を比較、対照することはできない。そこで、ここでは、遺構や諸史・資料を参照しながら、ヴァラッロの初期の‘エルサレム’がどのようなものであったのかを考察し、視覚的にもわかり易いように示した。そして、この作業から、ヴァラッロの初期の‘エルサレム’が、西欧のその他の国々の複数の模造建築からなる‘エルサレム’の複合体と共通点をもっていたこと、さらに、カイーミ没後に挿入されかけたと推測される‘苦しみの道’が、やはり、西欧におけるもうひとつの‘留’による‘エルサレム’模倣と関わっていた可能性を明示した。

第4章（トスカーナ管区サン・ヴィヴァルドのサクロ・モンテ フラ・トマーゾ・ダ・フィレンツェの‘エルサレム’）においては、ヴァラッロのそれよりわずかに遅れて、同じくフランシスコ派厳修会の修道士トマーゾ・ダ・フィレンツェ（？～1534年）によって、16世紀初頭に創設された複合的巡礼施設について考察した。この施設は、ヴァラッロではほとんど失われてしまった創設時の地形模倣的設営が、今日も比較的よく留められている点で重要である。とはいえ、サン・ヴィヴァルドにおいても、ヴァラッロにおいてと同様に、後代に、創設者の構想にはなかった礼拝堂の付加や献堂名の改変が行われており、複数の構想の重層化が認められる。それゆえ、本章においても、サン・ヴィヴァルドの施設の当初の様相がまずは明らかにされなければならなかった。同施設の初期の設営は、すでに20世紀後半、ことに第4四半期から本格的なアプローチがなされて解明に近づいているが、若干の同定問題が残されていたので、史料群の再調査と現地踏査とによってそれらを可能な限り解決し、改めて当初の施設がマムルーク朝時代の聖都エルサレムとその周辺のキリストゆかりの場所を、地形的、舞台美術的に忠実に再現しようとしたものであったことを示した。なお、この施設については、礼拝堂の建設順序が不明であるため、ヴァラッロのように、西欧のその他の国々の複数の模造建築からなる‘エルサレム’の複合体との共通点を明確に示すことはできなかったが、もうひとつのエルサレム模造法である‘留’による初期の複合体群と無縁でなかったことは、トマーゾの‘エルサレム’を復元する作業のなかで明示した。

最後の章（形態の変遷から見たその後のイタリアにおけるサクロ・モンテとその他の複合的巡礼施設の展開）は、サクロ・モンテの起源の問題とは直接関係してはいないが、初期のふたつの‘代用エルサレム’に後続するイタリアのサクロ・モンテ群が、その後どのような形態的展開を見せたのかを考察するために本章を設けた。イタリアにおいては、ルターによる宗教改革の勢いがおさま

るまで、しばらくの間、初期のふたつの施設に類するサクロ・モンテの建設は行なわれなかった。代用エルサレムに類する施設が登場したのは、トレント公会議（1545～1564年）後、対抗宗教改革が熱を帯びる16世紀も末になってからのことであった。しかし、新たに登場したサクロ・モンテ群は、ごくわずかな例を除き、もはや聖地パレスティナに直接関係してはおらず、カルロ・ボッロメオやカルロ・バスカペらによる相次ぐ再整備によって改造され、教理教授の有効な道具となったヴァラッロのサクロ・モンテを直接手本とするか、少なくとも再整備後の基本的約束事である配列のわかり易さを遵守していた。従って、主題が聖人の奇跡や生涯に拡大されても、玄義の諸場面を出来事の継起順に配列するという基本事項は共通していた。また、17世紀以降は、‘ロザリオの玄義’や、続いて‘十字架の道’が主題として人気を得るようになり、主題が多様化した。そして、それに伴って、サクロ・モンテにも新しい形態が登場するようになった。そうした新しい主題は、正規の‘ロザリオの祈り’の実践や、‘十字架の道’の信心行と密接に関係していたので、それらを主題とするサクロ・モンテは、一定の数の‘^{スタチオ}留’の礼拝堂が一定の間隔をおいて山上や斜面上に行列的に配される形をとることになった。ヴァレーゼの‘ロザリオ’の施設はその典型であり、その後建設されたサクロ・モンテの形態的手本となった。しかし、ヴァレーゼの形態を模範にしているとはいえ、17世紀以降のサクロ・モンテ群は、形態的、類型的に実に多彩な展開をみせている。そこで、本章では主に形態に着目してその多様な展開の様子を跡付けた。